

## 『学会開催報告』

第48回日本腹部救急医学会総会  
The 48th Annual Congress of Japanese  
Society for Abdominal Emergency Medicine金沢大学医薬保健研究域医学系がん局所制御学  
(第二外科学)

藤 村 隆

平成24年3月14日(水)、15日(木)の2日間、石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ANAクラウンプラザホテル金沢、金沢市アートホールにおいて、第48回日本腹部救急医学会総会を開催させていただきました。開催前日は3月としては珍しい吹雪となり心配されましたが、学会期間中は一転して天候にも恵まれ、消化器外科医・内科医、救命救急医、放射線科医を中心に、研修医やコメディカルスタッフの参加も含め、計2,000名を超える出席者がありました。

本学会は、腹膜炎、膵炎などの腹部の急性疾患や、腹部の外傷性疾患などの腹部救急疾患を学ぶことを目的とした学会であり、会長講演、理事長講演、特別講演に加えて、3つの教育講演、2つの特別企画、8つの教育セミナーなど、過去最高の計1,286題の発表があり、活発な討論が交わされました。また救急疾患を経験し自ら発表する若手医師の登竜門の場でもあり、今回の学会でも研修医企画には123題もの応募があり、優秀賞30名が表彰されました。

札幌医科大学の平田公一先生による理事長講演では、日本腹部救急医学会の歴史に触れられた後に、『急性膵炎および急性胆道炎の診療ガイドライン』の作成により本学会が社会的貢献を果たしてきたことが紹介されました。そして本学会の今後の目標として、次世代医師の育成とそのための教育、指導者の育成、外科学・救急医学・集中治療学・放射線診断学での横断的連携と臨床研究の実践、診療ガイドラインの作成と診療内容の評価、臨床データベースの登録体制の確立、統合的チーム医療体制の確立などを掲げられ、方向性を明示されました。

本総会会長の太田哲生教授による会長講演では、長年にもわたり難治性膵疾患の治療に携わってきた膵臓外科医としての経験から、膵疾患の病態に関する3つの“常識の嘘”が紹介されました。中でも腹部救急疾患に関連のあるものとして、急性壊死性膵炎の病態について以下のような誤解のあることを指摘されました。すなわち急性壊死性膵炎での壊死部の診断には、造影CTで膵実質に明らかな造影不良域を認めるものと急性膵炎診療ガイドライン(初版)に記載されているものの、発症初期の造影不良域は壊死ではなく、膵実質内で産生されたangiotensin IIによる可逆的虚血であり、局所でのangiotensin II産生をコントロールするような治療を行うことで、病状の改善が得られる可能性を強調されました。

特別講演として、日本テレビ放送報道局の高田和男様から「医療現場の取材メモからーいのちの授業に寄せる思いー」のタイトルで、ある癌患者さんの生き方をもとに、生きることの意義、命をつなぐことの意味などをお話いただき、聴衆に命の尊さを改めて問いかけられました。教育講演1では、福井大学の寺澤秀一先生から、最近志望者が減少している外科医を増やすための指導のコツに関する講演、教育講演2では、日本医科大学の松本尚先生から、ヘリコプター医としての経験からみた外傷外科のシステム構築の提案、東邦大学の島田長人先生から、近年注目を浴びている総合診療医の腹部救急医療へ

の関わりについての講演があり、いずれもこれからの我が国の医療を考える上で大変示唆に富んだ内容であり、参加された先生方は興味深く傾聴されていました。

特別企画(1)では、「自然災害時での救助・救済・復旧・復興・振興に向けた取り組みー能登半島地震や東日本大震災を振り返ってー」と題して、東日本大震災を志津川病院で経験された東北大学の菅野 武先生、能登半島地震を地元の医師として体験された恵寿総合病院の神野正博先生、多くの震災の際に現場に駆け付けられた金沢大学の稲葉英夫先生の3人の講師にご講演をいただきました。各先生の貴重な体験から、病院としてのハード面とソフト面からの地震対策、地域における援助と経済的な復興、DMATなど外部からの支援などについて、様々な提言がなされました。また、特別企画(2)「脳死臓器移植を救急医療として見つめるー脳死臓器移植は救急医療における命のバトンタッチー」では、救急医の立場から名古屋大学の松田直之先生、肝移植医としての立場から旭川医科大学の古川博之先生、東京大学の田村純人先生、移植コーディネーターの立場から日本臓器移植ネットワークの朝居朋子様から、ご発表をいただきました。2010年の臓器移植法の改定により増加が期待される脳死臓器移植について、救急治療を受けている患者が突然脳死移植ドナーとなる状況の中でスムーズな命の受け渡しをすることは非常にデリケートな問題であり、救命救急医、外科医のみならず、患者との橋渡しをする移植コーディネーターの役割が重要であることが指摘されました。

本学会の特徴の1つとして、若い先生方を中心に腹部救急医療のトピックスを学習していただくために、教育セミナーのセッションがあります。今回の学会では、敗血症・DICセミナー、血液浄化セミナー、漢方セミナー、Oncologic emergencyセミナー、Proton pump inhibitorセミナー、Hands-on創閉鎖セミナー、Comedical向け栄養・ストーマ管理セミナー、小児救急・放射線科セミナーの計8つのセミナーが開催され、いずれも大変盛況で短時間に理解を深めることができたという点で好評を博しておりました。もう1つ人気を集めたセッションは、放射線科系の学会では比較的行われているfilm interpretationでした。学会会期中コンピューター上で提示される6症例の画像を閲覧して、正解を当てるもので、誰でも参加できるものでした。非常に難しい問題が多かったにもかかわらず多数の応募があり、成績優秀者の先生は表彰されました。

最後になりましたが、今回の学会の開催に当たり、北陸三県の多くの外科・内科・救急科・放射線科の先生方、看護師・薬剤師・栄養士などのコメディカルの先生方、金沢大学十全医学会、金沢大学第二外科同門会、金沢大学消化器・乳腺・移植再生外科のスタッフを始め、たくさんの方々にご支援をいただきました。皆様には心よりお礼を申し上げます。

